かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

蝋梅（ろうばい）

初代の心にかえり信仰の喜びを
深めよう　伝えよう　広げよう
一、持ち場立場で日々理作り
一、家族揃って教会参拝
一、一日一件にをいがけ

立教172年
2月号

たすけ一条に邁進して 存命の教祖を身近に 感じられる三年千日に

春季大祭講話（大教会長様）

昨日の年頭会議で、大教会創立百二十周年に向かう成人の歩みについて、スローガンと実践項目を発表し、その内容についてお話ししました。

「初代の心にかえり信仰の喜びを 深めよう 伝えよう 広げよう」というスローガン中の「信仰の喜び」ということについてお話ししましたが、昨日話していないもう一つの「信仰の喜び」ということについて、今日はお話ししたいと思います。

明治二十年、教祖が御身をお隠しなされたことについては、よく「おつとめの急き込み」ということについて聞かせていただきます。

おつとめを急き込むが故に、二十五年先の定命を縮めて御身をお隠しなされたといこと、それによって、おつとめの大事さということを聞かせていただきますが、御身をお隠しなされたのには、もう一つ大きな意味合いがあります。

それは、「教祖存命の理」ということについて大きな意味合いがあるということです。

今日はそのことについて少しお話ししたいと思います。

『教祖伝』の「第十章　扉ひらいて」を少し拝読し、そこから共に思案したいと思いますが、今日拝読するところは、まさしく教祖が御身をお隠しなされたそのところから以降を拝読します。

大概は、教祖が御身をお隠しなされるまでの、教祖のご身上を通してお側の人達と種々練り合い談じ合いがあって、そして「心定めが第一やで」というお言葉でおつとめを急き込まれたということで、御身お隠しに至るまでのお話は良く聞きますが、今日は御身お隠し以降を拝読したいと思います。

つとめは、かんろだいを中に囲（かこ）んで行われた。この日、つとめの時刻には参拝人が非常に多く、その数は数千に達したので、つとめ場所の南及び東には、濫りに入り込まないよう竹を横たえて結界としたが、次々とその数を増して来る参拝人のため、遂にその竹は細々に割れたという。つとめは午後一時頃から始まったが、とう〳〵巡査は一人も来なかった。かくて、つとめは無事に了った。人々にとっては、これこそ驚くべき奇蹟であった。

しかし、これと立て合うて、陽気な鳴物の音を満足気に聞いて居られた教祖は、丁度、「だいくのにんもそろひきた」という十二下りの最後のお歌の了る頃、一寸変ったそぶりをなさったので、お側に居たひさが、お水ですか。と、伺うた処、微かに、

「ウーン」

と、仰せられた。そこで水を差上げた処、三口召し上った。つゞいて、おばあ様。と、お呼び申したが、もう何ともお返事がない。北枕で西向のまゝ、片手をひさの胸にあて、片手を自分の胸にのせ、スヤ〳〵と眠って居られるような様子であった。ひさは大いに驚いて、誰か居ませんか、早く眞之亮さんを呼んで来て下され。と、大声に呼んだ。報せを聞いて、眞之亮が早速駈けつけた。つゞいてたまへ、おまさ、と、相次いで駈けつけて来た。

たまへの着いた時、眞之亮は、嬢（いと）、早よ来い。と、大声で呼んだ。たまへは、おばあ様がおやすみになって居るのに、そんな大声を出してよいものか、と、いぶかって居ると、側に居たひさが、嬢（いと）ちやん、おばあ様がこんなになられた。と、言いながら、たまへの手を教祖のお顔に持って行き、つめたいやろな。おばあ様は物言わはらへんねがな。と、言うたので、それを聞いて、初めてそれと知ったたまへは、「ワー」と大声で泣いた。眞之亮は、泣くな。と、なだめてから、早速一同の人々に事の由を伝えた。

つとめを無事了えて、かんろだいの所から、意気揚々と引き揚げて来た一同は、これを聞いて、

たゞ一声、「ワーッ」と悲壮な声を上げて泣いただけで、あとはシーンとなって了って、しわぶき一つする者も無かった。

教祖は、午後二時頃つとめの了ると共に、眠るが如く現身をおかくしになった。時に、御年九十歳。

人々は、全く、立って居る大地が砕け、日月の光が消えて、この世が真っ暗になったように感じた。真実の親、長年の間、何ものにも替え難く慕い懐しんで来た教祖に別れて、身も心も消え失せんばかりに泣き悲しんだ。更に又、常々、百十五歳定命と教えられ、余人はいざ知らず、教祖は必ず百十五歳までお居で下さるものと、自らも信じ、人にも語って来たのみならず、今日は、こうしておつとめをさして頂いたのであるから、必ずや御守護を頂けるに違いないと、勇み切って居ただけに、全く驚愕し落胆した。人々は、皆うなだれて物を言う気力もなく、ひたすらに泣き悲しんで居たが、これではならじと気を取り直し、内蔵の二階で、飯降伊蔵を通してお指図を願うと、

さあ〳〵ろっくの地にする。皆々揃うたか〳〵。よう聞き分け。これまでに言うた事、実の箱へ入れて置いたが、神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としっかり見て居よ。扉開いてろっくの地にしようか、扉閉めてろっくの地に。扉開いて、ろっくの地にしてくれ、と、言うたやないか。思うようにしてやった。さあ、これまで子供にやりたいものもあった。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん〳〵に理が渡そう。よう聞いて置け。

と、お言葉があった。

さあ今から世界を平な地にする。今迄に言うた事は、実の箱に入れて置いたから、いよ〳〵親神がやしろの扉を開いて出たからには、総て現われて来る。子供可愛いばっかりに、その心の成人を促そうとて、まだこれから先二十五年ある命を縮めて、突然身をかくした。今からいよいよ、世界を駈け巡ってたすけをする。しっかり見て居よ。今迄とこれから先と、どう違うて来るか確り見て居よ。昨日、扉を開いて平な地に均そうか、扉を閉めて均そうか、と言うた時に、扉を開いて平な地に均してくれと、答えたではないか、親神は心通りに守護したのである。さあこれ迄から、子供にやりたいものもあった。なれど、思うように授ける事が出来なかった。これから先、だん〳〵にその理を渡そう。

このお諭しを聞いて、一同は、アッと思った。が、昨日答えた言葉を、今日言い直す事は出来ぬ。昨日お答え申上げた時の一同の心からすれば、姿をかくされようとは、全く思いもかけない事であった。しかしながら、姿をかくして後までも、生きて働かれると聞き、成程、左様であるか、教祖は、姿をかくして後までも、一列たすけのために、存命のまゝお働き下さるのか、それならば、と、一同の人々は漸く安堵の胸を撫で下ろした。

さあ〳〵これまで住んで居る。何処へも行てはせんで、何処へも行てはせんで、日々の道を見て思やんしてくれねばならん。

（明治23・3・17）

一列子供を救けたいとの親心一条に、あらゆる艱難苦労の中を勇んで通り抜け、万人たすけの道をひらかれた教祖は、尚その上に、一列子供の成人を急込む上から、今こゝに二十五年の寿命を縮めて現身をかくされたが、月日の心は今も尚、そしていつ〳〵までも存命のまゝ、元のやしきに留まり、一列子供の成人を守護されて居る。日々に現われて来るふしぎなたすけこそ、教祖が生きて働いて居られる証拠である。

月日にハせかいぢううハみなわが子
かハいいゝばいこれが一ちよ　一七　16

それまで親しんでいた、また、頼りとしてきた教祖が目の前から姿を隠してしまった。

今でこそ姿が「隠された」という表現ではありますが、当時の人々にとってみれば、ああもう教

祖が居なくなってしまった、死んでしまった、という思い一杯だったろうと思います。

これから世界だすけはどうなってくるんだろうか、もうこれで世界だすけは終わってしまうのか、自分たちはこれからどうすればいいのか、この道をどう通っていけばいいのか、いろんな複雑な思いがしたのではないでしょうか。

そこで、何か親神様の思いを聞かせていただこうと、本席様を通しておさしづを伺ったところ、「決して死んだわけでも、居なくなったわけでもなく姿を隠しただけで、今まで以上にたすけ一条の上に歩んで行く。さあ安心しなさい、何も心配は要らない。これまでに渡したくても渡せないものがあったが、姿を隠した今こそ、この渡せないものも渡してやれるのだ。さあ益々勇んで通れ。」というようなお言葉を聞かせていただいた。

それを聞いて安心するとともに、をやが共にたすけ一条の上に歩んでくださる、たすけの理もこれまで以上に私達に授けてくださる、有り難い、さあ勇んで通らなければ、とむしろ勇み立ったのです。

教祖お一人のおたすけから始まったこの道。しかし、教祖お一人のたすけだけでは、なかなか世界たすけになるためには難しい。身体一つで世界中を駆け巡ってたすけをしていくことはできない。ならば、たすけ一条に歩む人におさづけを授けることによって、教祖に替わって世界中をたすける人が出てきたなら、いよいよ世界だすけは速まる。さあ、授けてやろう。しっかりとたすけ一条に邁進してくれ。――そのように聞かしていただきました。

教祖お一人ではできなかったおたすけ、限りあるおたすけが、教祖が御身をお隠しなされることによって、道は急激的な発展をしました。教祖が御身をお隠しなされることによって、人々がたすけ一条に勇み立ち、そのことによって、お道は燎原に火を放つがごとく拡がりました。このことを私達はしっかりと思案しなければならないと思います。

当然、笠岡の初代も、教祖が亡くなられた、最初はそう聞かれ心配もしたでしょうが、姿を隠しただけで今まで以上にたすけ一条に歩んでいくと聞かされ、よし、今まで以上にたすけ一条に歩かせていただこうと勇み立ったからこそ、今日の笠岡の道があるのではなかろうかと思います。

初代の頃は教祖のお姿を目の前に見ていたから、目には見えなくても心の中に教祖の姿がまざまざとあって、姿が見えなくなっただけではたらいてくださっている、と教祖と共にたすけ一条に歩ませていただけるという一つの喜びがあった。

さあ、年限が経って信仰も代を重ねてくると、確かに信仰の道は親から子、子から孫へと繋がってきている姿は有り難いと思いますが、しかしながら、正直私自身が、それじゃ教祖の姿を見たことがあるか、と言われたときに、はっきり言えば無いとしか言いようがない。

それでは、本当に教祖が分からないのかと、改めて考えてみましょう。

皆さん方もあると思いますが、朝晩にただ手を合わせているだけでは、なかなか感じられない教祖のおはたらき、その存在。一生懸命にをいがけし、そしておさづけをお取り次ぎする中に、教祖の先回りのおはたらき、そしてたすけ一条の教祖のおはたらきというものは、姿が見えなくても感じることができるんだということです。

一生懸命おたすけする、なかなか御守護いただけない。何とかそれでもたすかってもらいたいとおぢばに足を運び、神殿で親神様にお礼を申し上げ、続いて教祖殿の結界の前で、教祖何とかこの人をたすけてくださいとお願いすると、そこに何とも言えない赤衣を召された教祖を感じることができるのであります。

教祖の本当のお姿は分かりません。お顔は分かりませんが、そこに赤衣を召された教祖の存在を感じさせていただくことができるのであります。

そうして、ありがとうございますといって、またおたすけにかかったときに、ああ、教祖が共に歩いてくださっている、そういうことを感じなが

ら、にをいがけ・おたすけに歩くことができるのであります。

残念ながら私も成人の途上ですから、いつもというわけにはいきません、にをいがけに出て心を濁すこともあります。しかしながら、おたすけにかかり、おさづけを取り次ぎながら、教祖にお願いを申し上げると、また教祖がお側にいてくださり、教祖のお伴をしておたすけができているんだなぁという喜びを味わいながらおたすけにかかることができるのであります。

正しく信仰の喜びなのであります。

自分一人が苦労しているのではありません。

「なんで私がこんな苦労しながら信仰せなあかんねや、アホらしい。辛いなあ。苦しいなあ。」と思う日もあるかも知れません、思う日もあるのです。

しかしながら、そういう中でも、教祖の御前で「一人ではない、こんな中でも教祖が手を引いてくださっているんだ。有り難いなあ」と感じさせていただく――これこそが信仰の喜びではないでしょうか。

そして、そのことによって身上を御守護いただく。ああ、あんたたすかったがな、良かったなあ。会長さんありがとう、御守護いただきました。と、その声を聞いたときに、何とも言えない喜び、感激というものを味わうことができるのではないですか。また、ここに大きな信仰の喜びがあるのではないでしょうか。

どうぞ、この三年千日、しっかり信仰の喜びを深めましょう。そして、伝え、広げていきませんか。

一人ではないのです。にをいがけは一人かも知れない、信仰も一銘一人、一人ひとりかも知れない。しかしながら決して一人ではないのです。

どんな辛い中も教祖が側にいてくださって、共に歩んでくださっているということ、それをしっかり味わわせていただけるような信仰に、お互いならしていただいてこそ、本当に信仰を伝え、広めることができるのではないでしょうか。

教祖の姿が見えないから教祖が分からないのではないのです。むしろたすけ一条に邁進すればするほど、教祖を身近に感じさせていただくことができて、より勇んでおたすけにかかることができるということを、改めて共々に心に置いて、親神様、教祖にお勇みいただき、そしておはたらきいただけるように、しっかりと心をつくらせていただいて、成人の道を歩みたいと思います。

今分からないから、今感じないからダメなのではなくて、それを感じるようになれる三年間の成人の歩みにしたいと思う次第であります。

共々に勇んで三年千日歩ませて頂きましょう。

《以上要約》

◆訂正とお詫び◆

大教会年頭会議において配布された小冊子『立教172年 年頭会議各部会の抱負及び年間行事予定』および『かさおか』（第48巻 第1号）に掲載された同再掲において、「布教部」の「**◎年間行事 1．立教172年 教会長講習会**」の「講師」の項について左の通り誤りがありました。読者ならびに関係者のみなさまにご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

講　師　芦津部属 理風（みちかぜ）分教会長・天理やまと文化会議議員委員　井上隆文先生

・原・稿・募・集・

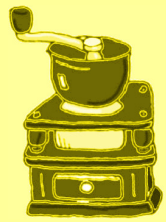
内　容　①小随筆　②教会・布教所の独自の活動の紹介　③俳句・和歌・川柳　④教会行事開催後の報告記事 等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）。題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は１句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵　便：〒714-0066
岡山県笠岡市用之江377
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@yahoo.co.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

談話室



親心

芦品分教会　金谷　眞佐代

去年の十二月二十日、三年間おたすけに通わせて頂いた元主人の弟が五十三歳という若さで出直されました。おたすけ人として、お葬式には、行かせて頂きたいと思いましたが、まわりの人達から「行かない方がいいんじゃない。」と言われ、実家である布教所へ、五十三年間お連れ通り頂いたお礼の参拝をさせて頂きました。

三年前に、元主人の弟が身上であることを聞きました。布教所の月次祭のおさがりを毎月、一時間くらいかけて、持って行かせて頂き、おさづけをとりつがせて頂いていました。私のうつ病の身上をたすけて頂いた話をさせて頂き、ぜひ、おぢばがえりをと、お誘いしましたが、なかなか実現できませんでした。それでも毎月、おさがりを持って行かせて頂ける所があること。おさづけをとりつがせて頂けることに、喜びを感じていました。元主人の弟は、銀行員でしたが、「若年性アルツハイマー」という身上をいただきました。その身上者のお父さんも同じ身上の時、私の両親が、おたすけに通わせて頂いていました。この時、心から因縁の自覚をさせて頂き、御恩報じの道を歩ませて頂き、少しでも因縁を切っていただかなければと思わせて頂きました。元主人の弟のお嫁さんはとても年も若く、美しい人でした。一生懸命、身上の主人のお世話取りをされていました。このお嫁さんの姿を見ていて、必ずたすかっていただけると思っていました。

三年間、おたすけに通わせて頂き、今、細い道ができたと思わせて頂きます。これから、お嫁さんにおぢばがえりして頂き、もっとしっかりとした道をつけさせて頂き、因縁を少しでも切っていただきたいと思っています。

お葬式には行けませんでしたが、姪である私の娘三人が行かせて頂き、その時弔電の中に、「天理教輸送部」と、読んでいただいたそうです。私は、お葬式でこの天理教という事を皆様に聞いていただけたこと、これが、親神様の親心と深く感謝いたしました。私の長女が何年か前、私の身上をたすけて頂きたいと、本部で勤務することを定めてくれました。長女にも心から感謝しています。

明日は布教所の一月の月次祭です。また新たな気持ちで今は亡き元主人の弟の家へおさがりを届けさせて頂こうと、勇ませて頂いております。

毎日ひのきしんだぁ

自転車で出かける際にはいつも前かごに火ばさみを置いている。ポイ捨ての空き缶を拾うためだ。15年以上前からポイ捨ての多さに気がついて拾い始めた。1時間ほど自転車に乗っている間に10個～15個拾う。初めのうちは誰か人が見ているときは拾えなかった。何か照れくさい感じでね。今は人の目に慣れたのか余り気にしなくなった。道路脇やらにコロがしているのや、塀の上に乗せているもの、危ないのはガラス製の瓶を塀の上に置いてある。悪質なのはコンクリートの塀や土台に水が抜けるように空けてある丸い穴にわざわざ押し込んであることも……。火ばさみなら自転車にまたがったままで拾える。昔は悪態をついていた。何処の馬鹿かとか、親の顔が見たいわとか(親だったりして)いつ頃からか感謝して拾えるようになった。環境美化、環境美化、健康感謝、健康感謝と唱えて拾う。良いことをしてても腹を立てたり憎んだりでは、埃りを積んでこっちが損をする。あちらを見回しこちらを見回しながら走行するので自然自転車はスロー運転になる。まあ前からのんびり走っていたが輪をかけてかな。すると後ろから女房が電動自転車でビューと抜いてゆく。「何をトロトロ走ってるの！」のセリフ付きだ。家に帰っても言われる。「私ら仕事がいっぱいあるか

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます

親神様には人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいとの思召から この世と人間を創造（おはじめ）になり 以来今も変わらず身体の自由と 天然自然の御守護を下さっているばかりか約束の年限の到来を待ってこの世の表にお現れになり 陽気ぐらし実現に向かうこれの世界だすけの道をおつけ下さいました事は誠に有難く勿体ない極みでございます

私共は身上や事情を通して親心と御守護の有難さに気付かせて頂き 日々は喜びと感謝の心一杯に生活（くら）させて頂いておりますので その御恩報じとの思いからつくし運びと共にたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております

中でもこの月二十六日は月日の社になられ五十年の長きに亘って陽気ぐらしへのひながたをお示し下された教祖が 私達子供の成人を急き込む上から御身をお隠しになり 世界ろくじに踏み均しに出られた尊い日柄でございますのでおぢばでは春の大祭が行われます その理にならい 当教会に於きましても只今からおつとめ奉仕者一同 明治二十年当時命捨ててもの覚悟でつとめられた先人達に思いを馳せながら明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行わせて頂きます

御前には折からの寒さ又遠近を問わず今日の日を楽しみ寄り集いました理に繋がる子供達が 相共に声高らかにお歌を唱和し 尚も変わらぬ親心にお縋りする状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて地球温暖化による自然への関心の高まり 又世界的な経済不安により心の拠り所を見出せずにいる現代 今こそ親神様のお働きと親心を知らしめるべきこの旬に 笠岡は創立百二十周年記念祭に向かう三年千日仕切っての成人の歩みを迎える事が出来ました事は正しく旬（とき）を得たりの心境でございます

この旬を生かすべく初代の心にかえり信仰の喜びを深めよう伝えよう広げようを合言葉に 一、持ち場立場で日々理作り 一、家族揃って教会参拝 一、一日一件にをいがけを実践項目として申し合わせ 成人の歩みを進めさせて頂きます 親を信じ 親に凭れ 親の心に素直にたすけ一条に邁進させて頂く覚悟でございます

何卒親神様には世の荒波にもまれながらも親心を心の拠り所として決して見失うことなく 親孝心一筋に世界だすけに向かう皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして万たすけの上に尚も自由の御守護を賜り 人々に心の拠り所をお与え下さいまして 御恩報じの心に目覚め共にたすけ一条の道を歩む人が弥増し お望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

らのんびりできひん」相済みません。ある時ラジオでこんな放送を聞いた。〝ある人が仕事にも家庭にも恵まれて楽々と過ごしている。その運命に恵まれたのには と尋ねると、空き缶のポイ捨てを拾い続けて、その時にこう思う。ああ、ここに一つの徳を捨てているなあ、拾わせて頂こうと……〟腹立ちの心から、感謝の思いに変わったにはそれからかも知れない。出かけるときには必ず拾う。徳を拾う。今年もジャンボ宝くじを買った。何年も買っているがまだ徳分が足りないのか？私は空き缶を拾うぞ。（ひ）

笠岡五人衆四小間劇場

第五回「空腹の猫」

つづく

である。風貌は頑固一徹で、いつも洒落たミルキー帽を被り、自教会から教務支庁までそれこそ毎日（雪・台風・・そんなの関係ない）愛車であるテッシャ（自転車）を漕いでやってくる。寮生を送り出した後は、自らもにをいがけに勤しんで出られる。

或る日、いつものようににをいがけを終えて、寮長室に挨拶に行った時、いつぞに増して難しい顔が更に険しさを加え、気になったので問うてみた。「胃癌だ」との一言。更にお加減はどうですか、入院しなくていいんですかと勇気を出して尋ねると、「ワシは神様から身上を頂いた。これまでおさづけだけで来たんだから、喜んで身上と付き合っていくよ」と仰った。――

さて、今回の目指すキーワードとは日々理作り＆喜び×２（年頭会議・春季大祭講話より）であると・・。身上かしもの・かりもの「話では良く聞いておるのだが、なかなか心に治まらないのや。お前達に百回でも千回でも聞かしておく。万が一の時に役に立てばそれでいいのや」恩師の声が今にも聞こえて来そうである。

（ちょん）

こころの詩

移り来て二度目の新春感謝なる
手おどり勇み鳴物相和す
めでたさや三代揃いつとめする
平和祈念の元日の朝

東悠分教会前会長夫人　田林美智子さん

▼表紙の絵
福満分教会前会長夫人　福島悦子さん

▼4コマ漫画
大教会　上原元子さん

先日、笠岡創立百二十周年に向けての成人目標が発表された。

拝聴するに、思い当たる事は多々あり反省しきりなのだが、何に実行しようかと思いを繞らしていると、布教寮時代の恩師寮長先生が頭に浮かんだ。初代で教会を設立なされた吾人

大教会長様にお渡しください。

大 教 会 長 様

『かさおか』２月号のゲラ刷りができましたので、お目通しお願いいたします。

２月号の巻頭は「年頭会議における大教会長様お言葉(要旨)」の予定でしたが、録音がちゃんとできていなかったようで、原稿がとれませんでしたので、急遽「春季大祭講話」に差し替えさせていただきました。

ファックスではよみにくいかとも存じますので、念のため、明日、パソコンのプリンタで印刷したものを繁道先生にお託けいたします。

最終的に２８日にでも印刷しようかと思っておりますので、不備の点等ございましたら、２７日までにお知らせいただけると幸いです。

お忙しい中とは存じますが、よろしくお願い申し上げます。

立教１７２年１月２４日

岡 﨑 真 一